

# バードリサーチ 水鳥通信



サルハマシギ Photo by 澤 祐介

2016年 10月号

## 季節前線シギチドリ 低気圧の壁？

守屋年史(バードリサーチ)



季節前線シギチドリへのご協力ありがとうございました。今年の春期の調査で、2012年春期から5年分のデータを集めることができました。5年間で総勢114名の方にご協力いただきました。今回は、この春期のトピックをお知らせします。

寄せられたデータは確実な初認記録から少し初認記録か不確かなデータまで様々です。しかし、すべてのデータは、対象種がその時その場所に確実にいたという記録です。そこで、今回はすべてのデータを利用し、さらに多くのデータを参照とするため、全国シギ・チドリ類モニタリング調査の春期の結果も参照しました。集めたデータは、その地域で最も早い記録を抽出し初認記録として分析しました。

### はばまれたチュウシャクシギ



写真. チュウシャクシギ.

特徴的な結果が出たのは、チュウシャクシギでした。2012年から2015年までは4月後半には北海道南部で確認されていましたが、今年は4月中旬に北海道では観察されず、東北まで一旦留まりました(図)。今年の4月下旬の天候は、九州の南部に前線が停滞して本州以南は雨が多いものの、26日頃は気温が上昇し函館では桜が満開しました。しかし、30日には札幌上空に平年より9.1℃低い寒気が流入してきて、北海道で曇りや雨、オホーツク海側などで

は雪が降るような荒れた状況(気象庁HP 日々の天気図)となっていました。東北に留まった日が4/29なので、今まきに向かおうとする方向の低気圧に移動を妨げられたと考えられます。このような状況が、他の対象種への影響もあつたのか見てみると、アオアシシギが4月下旬に例年より遅れが見られました。

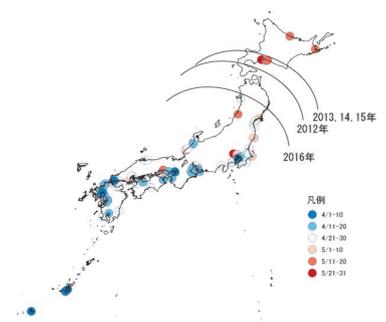


図. チュウシャクシギが4月までに到達した位置。

2種がちょうど北海道に向かう辺りで、低気圧に妨げられて渡りの一時中断をしたとして、Stop and Goの判断をなにを基準に行っているのでしょうか？気温や気圧、風速、雨量など気象にかかわる条件は多々あります。渡り鳥が気温の北上に伴って移動することが北米のカナダガンなどで知られており、シギ・チドリ類の渡りも温度との関係がありそうです。しかし、暴風雨に巻き込まれてからでは遅く、シギ・チドリ類は中継地の干潟や湿地が均等にあるわけではなく一度に大きく移動するため、事前に察知する必要があります。そのため鳥類には「傍鼓膜器官」という気圧を検知する器官を持っていて、渡り鳥は気圧変化で危険を判断しているのではないかと考えられています。シギ・チドリ類はこの器官がより発達しているかもしれません。

# 日中韓のガン・ハクチョウ越冬数

神山和夫(バードリサーチ)



今年もガンカモ類が渡ってくる季節になりました。私たちは日本へやってくる鳥だけに関心を向けがちですが、東アジアのガンカモ類は、繁殖地のロシアと越冬地である日本・韓国・中国を行き来する渡り鳥です。お隣の韓国と中国の越冬状況はどのようになっているのでしょうか？ 最近、これら三カ国での個体数調査の結果をまとめて、東アジアで越冬するガン・ハクチョウ類の個体数を分析した論文が発表されました (Jia *et al.* 2016)。私も著者のひとりとして日本の状況を執筆しているのですが、この論文をもとに、日中韓の越冬状況についてご紹介しましょう。

日本だとハクチョウなどは小さな池でも見られますが、中国ではガンやハクチョウは自然保護区になっている大型湖沼周辺にいて、日本のように人家近くへはあまりやって来ません。また北にある黄河流域は冬期に凍結するため、南の長江流域が主要な越冬地であると考えerことは妥当だと思います。韓国では、これらの種は日本と同じように農地で見られ、オオハクチョウへの給餌も行われるなど、人と距離の近い環境で生息しています。

## 飛び抜けて多い日本の越冬数

私には意外だったのが、広大な中国の越冬数に比べて、面積としては狭い日本の越冬数がとても多かったことです(図1)。日本はマガン、ヒシクイ、オオハクチョウの越冬数が他の二国より突出して多く、コハクチョウの越冬数は二位ですが一位の中国と近い数でした。一方、サカツラガンとカリガネは、ほぼ中国だけで越冬しています。なお、ヒシクイは種レベルで個体数をまとめていますが、亜種の分布を見てみると、日本には亜種オオヒシクイが多く、韓国では亜種ヒシクイが多く、中国も越冬している大部分が亜種ヒシクイです(図2)。



図2. ヒシクイ亜種の越冬地。  
(地図データ© 2016 Google, INEHI, ORION-ME.)

日本や韓国に比べて中国は十分に調査ができていない面はありますが、中国について執筆したJiaさんやCaoさんは、これらの種は沿岸部には少なく、長江流域の湖沼の越冬地データが中国で越冬する全個体数に近い数字だと考えることができると述べていま

## 越冬地間のつながり

これら三カ国で越冬するガンやハクチョウたちは、越冬地を別の国に変えることはないでしょうか？ あるいは、越冬地は違っていても、ロシアでは同じ地域で繁殖していることがあるのでしょうか？ 森口紗千子

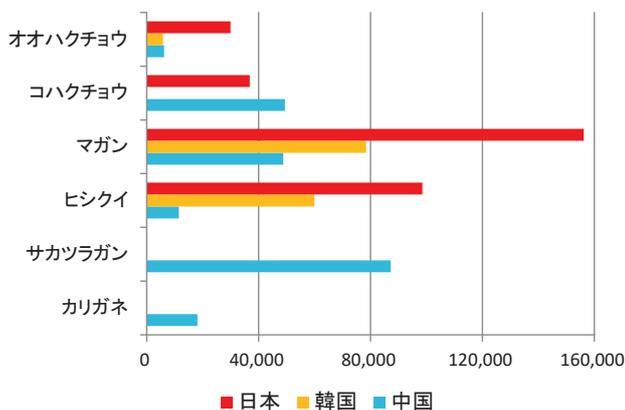


図1. 2010/11年のガン・ハクチョウ類越冬個体数。

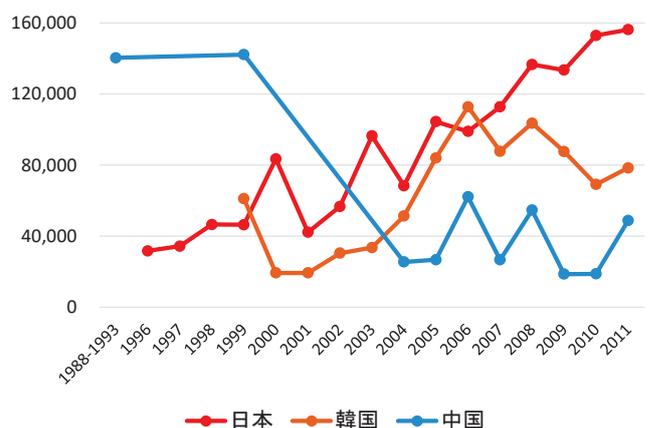


図3. 日本・韓国・中国のマガン越冬数の変化。

さん(新潟大学)が越冬地で集めたマガンの羽のDNAを分析して、地域間の遺伝的な関係を研究されているのですが、それによると、日本と韓国のマガンは同じ遺伝集団だと考えられますが、中国とは遺伝的な距離が離れているのだそうです。私たちの論文で紹介している三か国のマガンの個体数変化(図3)でも、日韓のマガン個体数が同時期に増えていることに対して、中国では増加が見られていません。こうしたことから、東アジアのマガンは、日韓と中国で二つの個体群に分かれていると考えられます。

## 日本から消えたサカツラガン

サカツラガン(写真1)は日本では迷鳥ですが、主な越冬地は世界でも中国の長江流域にあるポーヤン湖(写真2)など二カ所しかなく、そこに約75,000羽が生息しています。ところで、サカツラガンは日本でも1950年ごろまで定期的に飛来していました。2014年11月に北京で開催されたガン類研究者の集まり(Goose Specialist Group)で聞いたロシアのEvgeny Syroechkovskiさんの発表によると、現在のサカツラガンの主要繁殖地は中国・ロシア・モンゴルが接するあたりに縮小しているものの、かつてはアムール川流域に広く繁殖地があり、その個体群が日本に渡っていたそうです。ハクガンやシジュウカラガンが復活したように、サカツラガンも日本に戻ってほしいものだと思います。



写真1. 2011年1月に邑知湯(石川県)へ飛来したサカツラガン。(撮影 長門秋男)

## 懸念される中国の密猟問題

中国ではこの論文で分析した6種すべてが減少傾向にあることから、中国での保護対策が重要だと考えられます。生息地になっている自然湿地を保全す

ることはもちろんですが、もうひとつ必要なことがあります。ガン・ハクチョウ類は日本ではあたりまえのように農地を採餌環境に利用しています。北米やヨーロッパでも同様に農地で採餌していますが、中国では、おそらく強い狩猟圧のせいで自然保護区内の湖沼にしか生息できなくなっているようです。

中国では農地にやって来るガンカモ類は相当な数が農薬をしみ込ませた餌や罠で捕獲され、市場で売られています(MaMing *et al.* 2012)。農民が受けるのはカモ一羽が500円程度ですが、それが大都市では5,000円以上になるそうです。こうした狩猟は密猟行為であり、中国のバードウォッチャーからは厳しい批判が起きています。2012年11月に天津市の北大港湿地でガンカモ類の毒餌を食べてコウノトリが死亡した事件では、地元の保護団体が猟場となっているエリアのパトロールやかすみ網の撤去を行い、そのことがインターネットのソーシャルメディアを通して中国国内で大きな反響を呼んで、テレビでも放送されました。中国でもバードウォッチングが普及し、野鳥保護活動をするNGOが生まれています。時間はかかりますが、自然を大切に考える方が中国に広まっていくことを願っています。



写真2. 中国長江沿いのポーヤン湖は多くの水鳥の越冬地になっている。写真はソデグロヅルの群れ。(撮影 嶋田哲郎)

### 引用文献

- Jia *et al.* (2016) Population estimates and geographical distributions of swans and geese in East Asia based on counts during the non-breeding season. *Bird Conservation International*. 1-21.
- MaMing *et al.* (2012) Geese and ducks killed by poison and analysis of poaching cases in China. *GOOSE BULLETIN*. 15:2-11.

### 参考URL

- 森口紗千子ほか(2012) マガンの遺伝的構造と標識個体の観察記録からみた生息地間のつながり。  
<http://www.jawgp.org/anet/jg018b.htm>

# 大水薙鳥 (外洋性海鳥の研究最前線) - 書籍紹介

山本 誉士 (名古屋大学大学院環境学研究科)



## オオミズナギドリとは

皆さんはオオミズナギドリという海鳥をご存知だろうか？オオミズナギドリは、ミズナギドリ目ミズナギドリ科オオミズナギドリ属の海鳥で(写真



写真1. オオミズナギドリ.

1)、約158.7万羽が北緯24~42°、東経121~142°の東アジアの島々で営巣・繁殖しています。オオミズナギドリの繁殖(もしくは繁殖の可能性)が報告されている95島のうち、約8割は日本の周辺海域に位置しています(図1)。そうです。彼らはまさに日本の海鳥と言っても過言ではありません。繁殖地の多くは無人島や人里離れた僻地に形成されるため、フェリーに乗らない限り、彼らを目にする機会は少ないかもしれません。一方、オオミズナギドリは日本沿岸で最もよく見られる海鳥の1種で、外洋航海からの帰路で彼らが現れはじめると、乗船員たちは日本に帰ってきたことを実感するそうです。有人島である伊豆諸島の御蔵島は本種の最大の繁殖地であり、その他にも新潟県の粟島(6ページ参照)など、人が住んでいる島でも営巣

しています。これらの島を訪れて頂ければ、陸上にいる海鳥や、日没後に繁殖地に戻ってくる様子を観察することができます。

## オオミズナギドリの生態

オオミズナギドリは、地中に掘った長さ数十センチ~数メートルの巣穴や岩の割れ目などで営巣し(写真2)、繁殖期には一夫一妻で1羽のヒナを育てます。外見はよく



写真2. 地中に掘った巣穴で繁殖するオオミズナギドリ.

似ていますが、オスはメスに比べて体が大きく、オスは「ピーウイ」と甲高い声、メスは「グワーエ」と低い声で鳴きます。3月上旬頃から繁殖地への帰巣をはじめ、6月下旬に1個の卵を産み、卵は8月中旬頃に孵化します。親鳥は10月下旬~11月上旬頃までヒナに給餌し、その後、繁殖地から数千km離れた南の海域(パプアニューギニア北方海域、アラフラ海、南シナ海、北西オーストラリアのいずれか)まで移動して数ヶ月を過ごします。そして、2月下旬には再び繁殖地周辺海域に戻ってきます。さて、さらっと書きましたが、以上に述べましたように、オオミズナギドリの繁殖地での行動や生態に加え、彼らの海上での行動についても、今では実に多くのことが明らかになりつつあります。

## オオミズナギドリ研究の今

日本におけるオオミズナギドリの体系的な生態研究は、1980年頃に京都府の舞鶴沿岸にある冠島で開始されました(冠島調査研究会)。それに引き続き、伊豆諸島の御蔵島でも研究が開始されました。そして、現在では冠島と御蔵島に加え、日本国内では岩手県の船越大島と三貫島、新潟県の粟島、瀬戸内海の宇和島、長崎県の男女群島、北九州の白島、八重山諸島の仲ノ神島、韓国ではSasu島において、本種のモニタリングおよび行動・生態調査がおこなわれています。

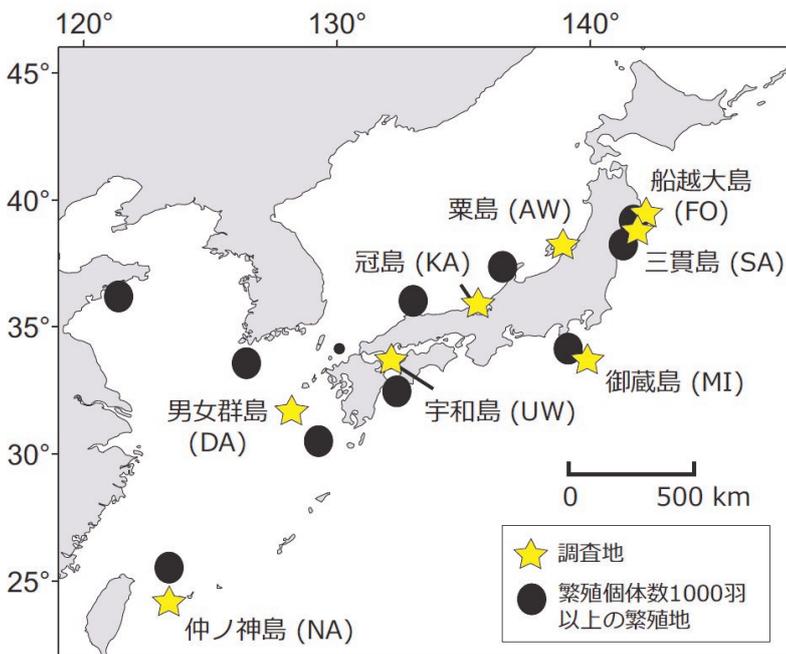


図1. オオミズナギドリの繁殖地(☆)と繁殖個体数1000羽以上の繁殖地(●)の位置.

調査内容は、足環による標識や繁殖モニタリング、ヒナ成長の計測、餌種の特定制といった繁殖地での基礎生態調査に加え、近年では様々な動物装着型データロガーを用いて、彼らの洋上での行動についても研究がおこなわれています(写真3)。例えば、GPSデータロガーやジオロケータを用いることで、彼らの繁殖期の採餌海域やその季節変動、さらに上記のように非繁殖期の渡り行動などの詳細が明らかになりました。



写真3. データロガーを足に装着したオオミズナギドリ。

また、加速度・深度データロガーを用いた研究では、オオミズナギドリは海上移動中にはあまり羽ばたかないこと(エネルギーの節約)や、ほとんど潜らずに餌を採っていることなど、様々な興味深い知見が得られています。そして、データロガーを用いた行動解析に加え、生理・分子生物学的分析、安定同位体比や汚染物質などの化学分析などと組み合わせた研究も活発におこなわれています。同一種について、これほどまでに様々な場所かつ様々な視点から研究が展開されている海鳥種は、世界でもそう多くはないでしょう。

## これを読めばオオミズナギドリがまるわかり

前置きが長くなりましたが、やっと本題に入りたいと思います。この度、オオミズナギドリに関する様々な知見を紹介する特集号が「月刊海洋」という雑誌に掲載されました(写真4)。本誌では、これまで明らかになったオオミズナギドリの行動・生態に関する最新の知見について、わかりやすく解説しております。また、研究は調査地があつてこそ！しかし、そのような調査地の現状はなかなか取り上げられる機会がありません。そこで、コラムとして各調査地の特徴や現状、そして直面する保全上の問題など、現場にフォーカスをあてた内容も掲載しております。各調査地で調査・研究活動に従事されている方々に執筆をお願いし、各著者の好きなよう



写真4. オオミズナギドリ特集号(上下巻)。

に書いて頂きました。そのため、書式としては統一感がないように感じるかもしれませんが、その反面、それぞれの方の情熱を感じることでできる非常に面白い内容になっております。さらに、本誌ではオオミズナギドリを取り巻く保全問題として、野猫やネズミによる捕食被害に対する取り組み、モニタリングサイト1000やMarine Important Bird and Biodiversity Areas(海上の重要生息地)に関する説明もしております。以上のように、本誌ではオオミズナギドリの行動・生態から保全まで幅広い内容を取り上げております。これを読めばオオミズナギドリの今がわかります！ぜひご一読頂ければ幸いです。

なお、本誌のご注文は海洋出版株式会社(<http://www.kaiyo-chikyuu.com/>)にお問い合わせください。**ご注文の際に「名古屋大学の山本誉士の紹介」とお伝え頂くと定価(2,400円+税)の2割引でご購入いただけます。**本誌は上下巻の2冊で出版されております。各巻の目次は以下をご覧ください。

### 目次(上巻)

#### [研究総説]

- ・シンポジウム「オオミズナギドリ研究集会」(山本誉士・塩見こずえ・白井正樹・米原善成・坂尾美帆)
- ・体サイズの種内地理変異(山本誉士)
- ・オオミズナギドリの呼吸を測る—呼気ガスチャンバー法と二重標識水法による代謝速度計測—(白井正樹)
- ・採餌・繁殖行動(越智大介)
- ・海鳥の帰巣能力(塩見こずえ)

#### [コラム]

- ・日本有数のオオミズナギドリ繁殖島とネコ問題の取り組み(岡 奈理子・山本麻希)
- ・京都府冠島におけるオオミズナギドリ 現状と課題(須川 恒・狩野清貴)
- ・瀬戸内海で繁殖するオオミズナギドリ: 山口県上関町宇和島(渡辺伸一・上田健悟・飯田知彦)
- ・八重山諸島仲ノ神島(河野裕美・水谷 晃)

### 目次(下巻)

#### [研究総説]

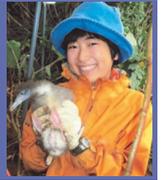
- ・採餌域の季節変化と渡り行動(山本誉士)
- ・オオミズナギドリをつかった海洋汚染モニタリング(山下麗・高田秀重・綿貫豊)
- ・漂流する海鳥から海流を推定(依田憲)

#### [コラム]

- ・海鳥の巨大コロニーの成立と存続条件—御蔵島のオオミズナギドリ繁殖集団の栄枯盛衰—(岡奈理子)
- ・人と暮らす海鳥—新潟県粟島のオオミズナギドリ—(白井正樹)
- ・三貫島・船越大島—岩手県—(塩見こずえ・米原善成・後藤佑介・坂尾美帆・佐藤克文)
- ・日本の海鳥の現状を知る—環境省モニタリングサイト1000—(富田直樹)
- ・海鳥の重要生息地「マリーンIBA」の選定(佐藤真弓・山本裕)

# 粟島のオオミズナギドリ調査

松本祥子(名古屋大学大学院環境学研究科)



粟島(あわしま)は新潟県北部の日本海に浮かぶ周囲23kmの離島で約84,000羽のオオミズナギドリが繁殖しています(山本 2011、写真1)。ここは島全体で粟島浦村という人口約370人のひとつの村であり、オオミズナギドリの繁殖地では数少ない有人島です。

オオミズナギドリは粟島の西海岸の斜面に長さが数十cmから数mの横穴を掘って巣穴をつくり、一夫一妻で1羽のヒナを育てます。6月下旬に産んだ卵は8月中旬に孵化し、ヒナは10月末から11月初めに巣立ちを迎えます。

私は8月下旬から10月に粟島に滞在し、育雛期の親鳥が採餌トリップ(繁殖地を出発してから海で餌を採って再び繁殖地に戻るまで)の間にどこを移動していたか調べています。ヒナが孵化して数日経つと両親ともに海に採餌に出かけ、日没後に巣穴に戻り(写真2)、ヒナ(写真3)に給餌すると日の出前には海へ飛び立ちます。そのため私の調査は夜8時から始まります。給餌のために帰巢した親鳥を捕まえて素早く背中にGPSデータロガーという小型の機器を装着して巣穴に戻し、およそ2週間後に再び捕獲してデータロガーを回収します。



写真2. 夜間に島に戻ってきたオオミズナギドリ。

データロガーは家に持ち帰ってからパソコンに接続しGPSデータをダウンロードします。粟島のオオミズナギドリの採餌トリップの多くは島周辺の約50kmで採餌し出発した日と同じ日の夜に戻る1日トリップですが、時には数日から10日間も出かけることがあります(図1)。これまでの調査により最も遠くでは日本海を北上して津



写真3. オオミズナギドリのヒナ(推定5日齢)。



写真1. 粟島の海岸。

軽海峡を通過し、繁殖地から950km離れた色丹島手前の海域を訪れており、この1回の採餌トリップは9日間

にわたり累計の飛行距離は3,100kmに達していました。長い採餌トリップに出かけてしまうと1週間以上も繁殖地に戻らないことがあるため、巣穴に帰っていないか毎晩2、3回チェックに行くもの、来る日

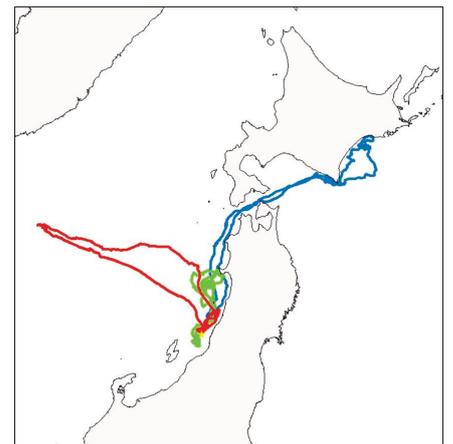


図1. GPSロガーで記録された粟島で繁殖するオオミズナギドリの移動軌跡の例。

も来る日も帰ってこずになかなか再捕獲できない時はもう戻ってこないのではないかと心配になります。それでも無事にデータロガーを回収できた時は感慨もひとしおで、得られたデータを見る時が調査中で最もドキドキする瞬間です。

オオミズナギドリを捕獲する時は、斜面に腹ばいになり深い巣穴に肩まで腕を突っ込むので毎日泥だらけになりながらの作業ですが、地道に続けるなかでヒナがどんどん成長していく様子が見られたり、親の新たな移動データが得られたときに楽しさややりがいを感じます。

## 引用文献

山本麻希. 2011. 新潟県粟島におけるオオミズナギドリの現状と生態. 海洋と生物 33: 205-210.

# 攪乱が越冬するシギに与える影響は？-論文紹介

守屋年史(バードリサーチ)



以前、シギ・チドリ類の干潟での分布を調査していたことがあります。そこは、干潮になると歩ける砂地の干潟だったので、貝掘りやゴカイ掘り、釣り人、バードウォッチャーなどがよく横切り、そのたびにシギ・チドリは右往左往したり、他へ飛んでいったりして、どれくらい迷惑なんだろうと思っていました。

そんな干潟で採食するシギ・チドリ類への攪乱の影響を調べた研究が報告されています。著者らは、冬にイギリス東部の北海に面したWash湾の干潟で、10種類のシギ・チドリ類(ダイシャクシギ、ミヤコドリ、オオソリハシシギ、ダイゼン、アカアシシギ、コオバシギ、キョウジョシギ、ハジロコチドリ、ミユビシギ、ハマシギ)を実験的に攪乱させました。人が近づいたときに飛んで逃げ出した距離(FID:flight initiation distance)、警戒していた時間、飛んで逃げている時間、再び餌を取り出すまでの時間、そして採食できなかった時間をパラメータとして分析しました。

結果として、体重の重い大型種は攪乱に対して敏感に反応し、逆に小型の種の反応は弱くなりました。これは、大型の種のほうが飢餓耐性が高く、また飛び立つのに時間がかかるからかもしれません。また、場所の影響でも異なり、人の立ち入りの少ない静かな場所だと反応が大きくなり、干潟の空間の大きさでも違いがあるようです。

また、一度の攪乱で失う採食に費やせる時間は、熱量換算でどの種も一日の0.1%以下でした。10%の採食機会を失うには、ハマシギで



写真. ハジロコチドリ(三番瀬).

180~270回の攪乱が起きることになり、少なくともこの調査地では、それほど人の出入りが少ないことから人の活動がそれほど悪い影響を与えているとはいえないと著者らは考えています。

日本の都市部の干潟に関しては人の出入りも多く、一概にはこの結論を当てはめられないかもしれませんが。ただ、シギも貝掘りの人は、動かないのであまり気にする様子はありませんし、夜間にもシギは採食しているため、エネルギーの摂取という意味では意外と影響は小さいのかもしれませんが。しかし、渡りの時期などは、彼らも時間がないでしょうから、採食の時間はジャマをしないほうが良さそうです。

## 紹介文献

Collop, C., Stillman, R. A., Garbutt, A., Yates, M. G., Rispin, E. and Yates, T. (2016), Variability in the area, energy and time costs of wintering waders responding to disturbance. *Ibis*, 158: 711-725.

# コアジサシ パネルディスカッションのお知らせ

増田直也(NPO法人リトルターン・プロジェクト)



コアジサシの保全活動をおこなっているNPO法人リトルターン・プロジェクト(以下LTP)では、毎年恒例の報告会で、今年はコアジサシについてのパネルディスカッション「絶滅危惧種コアジサシから見えるもの」を行います。コアジサシはなぜ絶滅しそうなのか!! コアジサシをキーワードに自然界の赤信号を七人の侍がひもときます!!森ヶ崎のコアジサシに対する素朴な質問(アンケートなどから)、マクロな視点から地球生態系の危機的状況を探ります。さらにLTPの果たすべき役割とは… まで議論を深めていきたいと思ひます。



写真. コアジサシのひな.

## パネラー紹介

- ・金井 裕(財団法人日本野鳥の会参与ほか)
- ・北村 亘(LTP代表、東京都市大学講師)
- ・早川雅晴(LTP副代表、植草学園大学准教授)

- ・大塚 豊(LTP理事、日本野鳥の会東京副代表)
  - ・松村雅行(LTP理事)
  - ・奴賀俊光(LTP理事、バードリサーチ研究員)
- コーディネーター: 生姜塚理恵  
(BLUE BIRD代表、アースデイ大学代表)

## 「2016年度リトルターン・プロジェクト報告会」

日時:2016年12月3日(土)14:00~16:30

場所:大田区民ホール・アプリコ:地下展示室

(JR蒲田駅東口徒歩3分)

内容:2016年シーズンの営巣結果、整備状況などの報告、パネルディスカッション、展示など

参加費無料、直接会場におこしください(先着200名)

お問合せ先:大田区環境清掃部 環境計画課

環境計画担当 TEL:03-5744-1365

リトルターン・プロジェクト TEL:090-1778-5917

# モニタリングサイト1000 シギ・チドリ類調査 交流会(東京)

守屋年史・奴賀俊光(バードリサーチ)



奴賀俊光

## 今年は内容盛りだくさんです！

モニタリングサイト1000のシギ・チドリ類調査参加者の発表と交流の場として毎年行ってきた「モニタリングサイト交流会」を、今年度は東京で開催します。

シギ・チドリ類調査に参加していない方もご参加いただけますので、シギ・チドリ類と湿地にご関心がありましたら、ぜひお越し下さい。シギ・チドリ写真コンテストも開催します。こちらも是非ご参加下さい！

### 日時

11月13日(日) 交流会 10:00～16:30 (参加無料)  
懇親会 17:30～19:30(別会場・会費制)

### 会場

エッサム本社ビル 3F グリーンホール  
JR神田駅 東口 徒歩3分  
東京メトロ銀座線神田駅 5出口 徒歩1分

### 内容

- ・モニタリングサイト1000について
- ・各地のシギ・チドリ類の状況報告
- ・繁殖地ロシアのシギ・チドリ類
- ・湿地や水辺の鳥を知ってもらうためには
- ・ポスター発表
- ・シギ・チドリ写真コンテスト(入賞者には賞品あり)

詳細プログラム等は下記HP(バードリサーチHPの右側の「イベント」をクリック)をご覧ください。

[http://www.bird-research.jp/1\\_event/shigichi2016\\_11.html](http://www.bird-research.jp/1_event/shigichi2016_11.html)

※写真コンテスト、懇親会のお申込みは、HPをご覧の上、シギ・チドリ類調査事務局 まで電子メール( [shigichi@bird-research.jp](mailto:shigichi@bird-research.jp) )でお申し込みください。

## 繁殖地ロシアのシギ・チドリ類

今年6～7月に、澤祐介さん(バードライフ・インターナショナル)、佐藤達夫さん(NPO法人行徳野鳥観察舎友の会)がロシアのレナ川河口湿地にあるシギ・チドリの繁殖地で標識調査を行ってきました。中継地の日本ではみられない繁殖地のシギ・チドリの様子を現地での写真をふんだんに使用して、お二人にお話ししていただきます。シギ・チドリ以外の珍しい種の繁殖情報や写真も見られるかも！?



写真 上: サルハマシギ、下: 佐藤達夫さん。今回の調査では、シギ・チドリ類には赤のカラーリングを左足に2つつけたそうです。(写真:澤祐介)

## 水辺の鳥を知ってもらうためには

シギ・チドリ類の個体数は全国的に減少傾向にあります。まさしく今、保全や保護を進めていかなければいけない状況ではありますが、シギ・チドリ類が広く知られているとはいえません。そこで、シギ・チドリ類の危機的な状況を伝えるとともに、湿地や水辺の鳥を知ってもらうために成すべきことは何かをテーマに講演、意見交換を行います。

### 講演者

- 芝原達也さん(谷津干潟自然観察センター)
- 大原庄史さん(NPO生態教育センター)
- 梅村幸稔さん(NPO藤前干潟を守る会)
- 和田太一さん(NPO南港ウェットランドグループ)

バードリサーチ 水鳥通信 2016年10月号(16号)

発行元: 特定非営利活動法人 バードリサーチ  
〒183-0034 東京都府中市住吉町1-29-9  
TEL & FAX 042-401-8661  
E-mail: [br@bird-research.jp](mailto:br@bird-research.jp)

発行者: 植田睦之

URL: <http://www.bird-research.jp>

編集者: 神山和夫・守屋年史・奴賀俊光・佐藤望

タイトル写真募集中!

ご提供いただける方は  
写真を電子メールにてお送りください!

このニューズレターはFSC認証紙を使用しています。